第8巻　第3号
発行日：平成29年7月1日

山寺通信

鶏谷山花栄寺だより

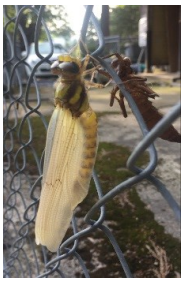
今号の記事：

- お盆にちなんで
- 山内整備、実施される
- 盆うちの案内
- 秋の団参旅行
- ご縁の力（チカラ）

お盆にちなんで

中国で成立した盂蘭盆経（うらぼんきょう）という経典は、目連尊者が自分の母を救った物語がテーマとなっています。それは次のようなお話です。

釈尊の高弟のひとり目連尊者は修行の結果、神通力を得ました。今でいうところの超能力です。その力を使って亡きお母さんに会いに行くことにしました。お釈迦様の教えの素晴らしさを母にも伝えたいと考えたのです。彼は、息子たる自分がお釈迦様の元でお悟りを開いたのであるから、母もその功徳の力によって、さぞ良い所に生まれ変わっているだろうと思い、天上界をのぞいてみました。しかし予想に反してお母さんはいません。「もしや」と疑った目連尊者が餓鬼界を探してみると、そこに懐かしい母の姿が――。


ある朝、お寺で

お母さんは飢えと喉の渇きに苦しんでいました。「なぜ、このようなことに…？」と問う尊者に母が答えます。「私は人間であった時に、お前という息子を愛しすぎた。お前の幸せの為ならば、よその子の食べている物も着物もお前にやりたかった。その愛執の故に、今こうして地獄の苦しみを得ているのです」と。驚愕した目連尊者は急ぎお釈迦様の元に帰り相談します。お釈迦様が言われました。「あなたの力をもってしては、お母さんを救うことはできません」と。神通力を得た自信を砕かれ、悲嘆にくれる目連尊者にお釈迦様が説かれます。「7月15日になると、大勢の修行僧たちが雨季の集中修行を終えて私の元に戻ってくるでしょう。その修行僧に食事の供養をしなさい。そうすれば、供養の一端があなたの母の口にも入る事でしょう」と。目連尊者はお釈迦様の言葉どおりに実践されました。そして次に天上界を神通力でみたときに、餓鬼界から転生した母が手を合わせて尊者を拝んでいる姿を見出したということです。

観音様の周りはお花畑

日本に盂蘭盆会が伝わったのは、推古天皇の時代前後です。当時最新の教えであった仏教の伝来からそれほど時間はたっていません。目連尊者の伝説も、よせ来る仏教の波の一つとして飛鳥の京に打ち寄せられたのでしょうか。以来、お盆行事として、千数百年にわたって私たちのご先祖様の信仰として受容されてきました。それが可能だったのは、実は仏教伝来よりはるか以前から先祖の霊魂を祀る信仰が根付いていたからであると思います。亡き先祖の霊との交流こそが現世で生きる人間の本来の生活そのものであったといってもよいでしょう。そのような条件の元で日本は仏教化したのですが、同時に仏教も日本化し、受け入れらてきたのです。

山内整備、実施される

去る5月27日（土）、今年度第一回目の山内整備が行われました。穏やかな天候の元、25名の皆さんからご参加いただきました。男性は屋外の草刈りと清掃、女性は屋内清掃と昼食準備を受け持っていただき、午前のみの活動でしたが、山内がすがすがしい雰囲気に変貌を遂げました。お疲れ様でした。

盆うちのご案内

下記日程にてお盆の法要を厳修いたします。例年どおり二日間の開催となりますが、どちらの日でも都合のよい日に参詣下さい。

期日：　7月8日（土）、9日（日）

日程：　10時30分から法話

　　11時から法要

　　終了後、本堂にておとき

秋の団参旅行

無著（むじゃく・大乗仏教の大成者。バシュバンズ）

撮影：金井杜道 氏

国宝八大童子立像
制多伽（せいたか）童子

kazu_sanの百寺巡礼より

今秋、鎌倉時代の仏師を代表する運慶の展覧会が東京国立博物館で催されます。そこで、今年は同展覧会拝観の計画を立てました。また博物館からほど近い山岡鉄舟ゆかりの臨済宗寺院・全生庵に拝登いたします。二日目は靖国神社と神社に併設されている遊就館を訪問します。いろいろなお立場があろうかと思いますが、実際の姿を思い込みや偏見をさしはさまずに見るという姿勢で臨みたいと思います。日程詳細は間もなく配布予定の案内文書をご覧ください。今年も心に残る旅のひと時を分かち合えたらと思っております。おおぜいのご参加をお待ちしております。

ご縁の力（チカラ）

素晴らしい表情の観音像を紹介します。全高は、台座まで含めて15センチ足らず、像身だけですと、わずか8センチほどの小さな立像です。このお像は、本堂の位牌堂で長いこと放置されたままになっていたのを修繕してお祀りしているのです。数年前に気づいたときには、すでに光背の上部分が欠損していました。縁ある方から細工していただき、いきいきとしたお姿がよみがえったように感じます。方丈の間にお祀りしておりますので、参詣の折にお立ち寄りください。